関西国際大学

2008年度 教育GP 採択

サービスラーニングを通して、大学４年間で

自律性　社会貢献　国際性　問題解決能力　コミュニケーション能力

21世紀型世界市民を育成

初年次サービスラーニング

サービスラーニングとは

社会貢献活動を通して、体験から活きた知識を学ぶことで、ボランティアやインターンシップなどとの大きな違いは体験したことを教員との対話・やりとりで「ふりかえり」により学びを深めることです。同時に、地域社会の課題を解決し市民としての責任を果たすことにもなります。「ふりかえり」により生まれた新たな問題意識や学習意欲をさらに次へとつなげていくというもので、従来の座学だけではなく、教室の知と社会実践とをリンクさせた新しいタイプの学び方です。

初年次サービスラーニングの取組

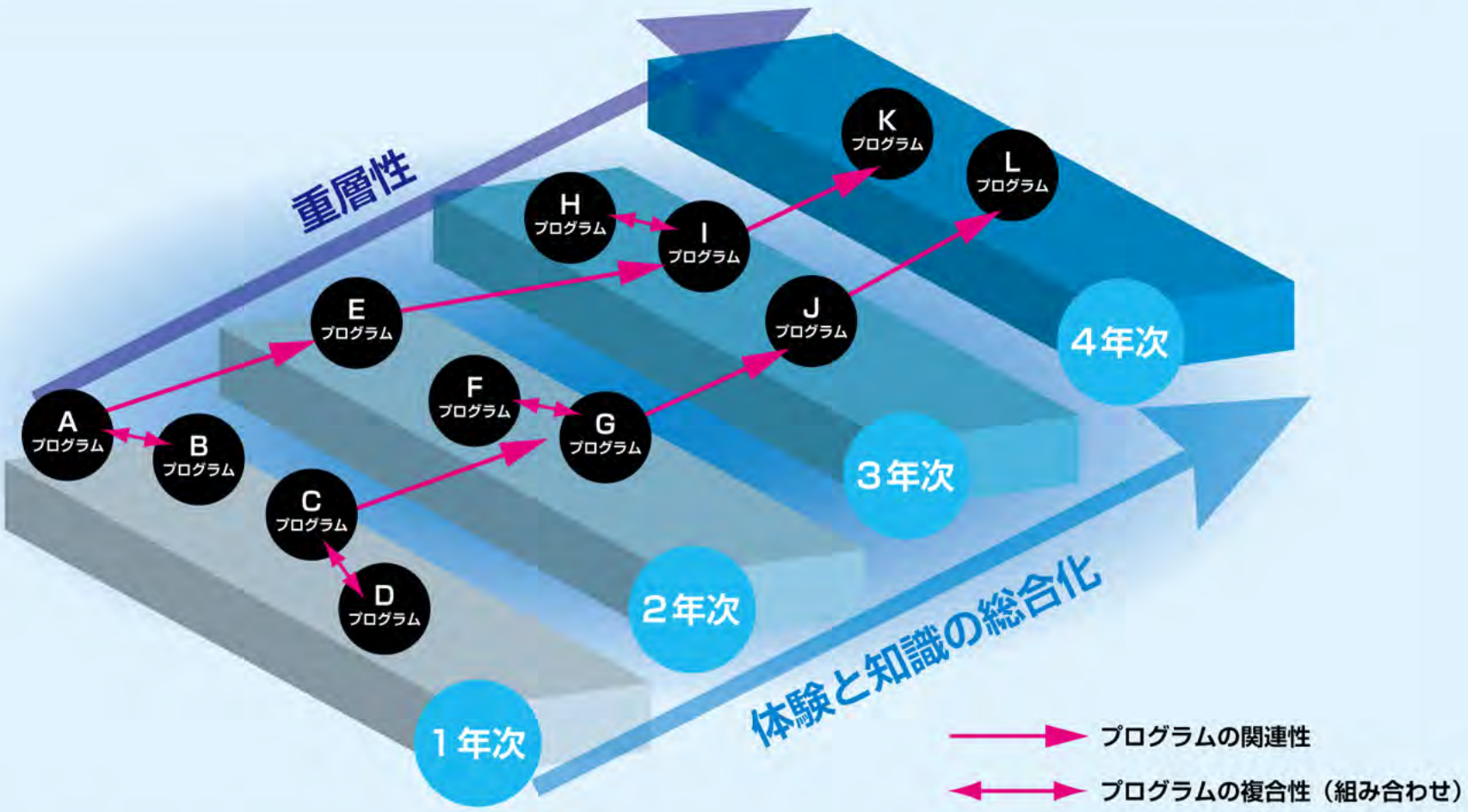
初年次から学士課程全体への複合的・重層的サービスラーニング

サービスラーニングの取組の評価体制

この取組は「形成的評価」（プログラム担当者の相互評価･学生に対するフィードバック･外部評価による担当者へのフィードバック）と「総括的評価」（学生による評価〖事前・事後アンケート、e-ポートフォーリオ・学内における自己評価・受け入れ先による外部評価・外部評価者による外部評価）の両面からの評価体制により、プログラム自体の質の向上と改善が随時行われます。

１年次の学びを重視。自主的に学ぶことの面白さを知る。

この取組は、大学１年次（初年次）にサービスラーニングを通して、自己発見と人間関係調整力を向上させるとともに、体験と知識を総合化する方法を学ぶというものです。そしてそれを基盤に２年次以降のより専門的な科目との連動により「重層的サービスラーニング」、また他の関連プログラムとの連動により「複合的サービスラーニング」と学びをさらに深めて、卒業までに本学の５つの教育目標への到達を目指していきます。１年次はその重要な入口と位置づけています。



目的を達成するための４つのステージ

体験と知識を総合化するツールとしてのｅ-ポートフォーリオで学習としてのフィードバックを重視。

準備

●体験に向けての基礎準備
○サービスラーニングの概説
○学習目標の明確化と理解
○活動目的の明確化と理解
○情報収集と活動準備
○活動計画の策定

参加と気づき

●参加と気づき
○体験の記録
○「気づき」の記録

伝え合いと分かち合い

●伝え合いと分かち合い
○体験と「気づき」の伝達
○体験と「気づき」の共有

ふりかえり

●ふりかえり（以下の内容）
○学習目標や活動目標
○体験や「気づき」
○伝え合いと分かち合い
○専門的知識との関連づけ
○今後の活動に向けて

e-ポートフォーリオ

フィードバックを重視

何を体験し、何を学んだか？　それにはどんな意味があるのか？　学んだことをもとに、次になにをすればよいのか？

What?　So what?　Now what?

●学習目標の明確化と「ふりかえり」(reflection) の関連づけ　●評価基準（ルーブリック）の明確化
●各ステージにおける評価・改善の意識づけ　●アクティブ・ラーニング（能動的学習）の活用
●体験と知識を総合化するツールとしてのｅ-ポートフォーリオ

本学におけるサービスラーニングの事例

初年次

日本の子どもと韓国の子どもを繋ぐ国際交流

目的／
外国文化体験を行い、こころ豊かな世界市民をめざす学びの必要性を認識するとともに、教育福祉を志すための自らの専門的課題を発見する。

内容／
日本と韓国の幼稚園や保育所を訪問し、学びや遊びの姿を観察して国を超えた子育てと教育の基本や文化の違いを見いだす。異文化体験の中でわが国の教育福祉の課題を認識し、保育や初等教育に関わる自らの専門性を高めるために必要な課題を発見するというもの。また同時に韓国の子どもたちに日本の遊びを紹介するとともに、韓国の子どもたちの様子を日本の子どもたちに具体的に伝えるなど、子どもたちの日韓交流に寄与する。

初年次

基礎的スキルの習得から地域での実践体験へ

目的／
チームでの問題解決の経験と、異世代交流により、「地域に出ていくための基礎的スキル」を習得し、自分たちの学習が地域貢献にどのようにつながるのかを体験的に理解すること。

内容／
初年次サービスラーニングの学習目標である「人間関係調整力の向上」と「自己発見」のために、5月初めに行われる宿泊研修では、ラーニング・コミュニティで参加することにより、チームワークを構築する（人間関係調整力の向上）。また、研修後、徹底的な活動のふり返りを行うことにより、自己への気づきを深め（自己発見）、高齢者大学との交流にむけて、自らの行動修正案を練る。高齢者大学との交流では、人間心理学科が地域貢献のテーマとして掲げている「子どもに関するサポート」に焦点をしぼり、学生が実現できそうな子どもサポート案を考える。そして冬学期に開講されるサービスラーニングⅡでは、学生が考えたサポート案のいくつかを、実践する機会を設けている。

複合化・重層化

複合的サービスラーニング

地域社会における生活支援の実際を学ぶ

目的／
社会福祉の専門科目（高齢者分野、障害者分野、児童分野）での学びについて、福祉現場での体験・実践したことを振り返り、具体的理解を深める。

内容／
福祉学専攻では、社会福祉に関する専門的な学びをより深めていくため、そして社会福祉領域における対人援助の専門職に求められる「価値」「知識」「技術」の習得のために、サービスラーニングを積極的に取り入れている。これら社会福祉の学びを体系的に進めていくため、各専門科目の担当教員が連携しサービスラーニングを含んだ授業を展開していく複合的なプログラムの展開を行っている。秋学期には「老人福祉論」「介護概論」「教育サービスラーニングⅡ」の科目で老人福祉領域5施設32名、「障害者福祉論」「地域福祉論」「教育サービスラーニングⅡ」の科目で障害者福祉領域 6 施設 39 名、「児童福祉論」「社会福祉援助技術論Ⅱ」の科目で児童福祉領域 5 施設 22 名の学生がサービスラーニングに取り組んだ。教室内外でのリフレクション（振り返り）を踏まえながら、テキストの内容が実践現場ではどのように表現されているのかについて、具体的な理解を深化させた。

複合化・重層化

複合化（基礎演習 × 発達心理学）

体験と知識の統合化
（子ども集いの場の運営を通じて、人間の発達への理解を深める）

目的／
地域の子どもを集め、遊びの場を運営する（サービス）。
また、各発達期（乳児期、幼児期、児童期前期、児童期後期）の遊びの特徴を観察し、ふりかえりを通して、人間の発達についての理解を深める（ラーニング）。

内容／
「子どもが集える場がない」との地域からの声にこたえ（カウンターパートナーは子ども会と三木市子育て支援課）、カプラ（積み木）と功技台を使用し、地域の子どもを集め遊びの場を運営する。最初にキッズオープンキャンパスで運営し、その後、地域に出て活動を展開する。
また、各発達期（乳児期、幼児期、児童期前期、児童期後期）の遊びの特徴を観察し、ふりかえりを通して、その観察を「発達心理学」の知識と結びつけることで、人の発達についての理解を深める。

複合化（幼児教育原理＋初等英語教育研究）

幼児の発達にあった「英語あそび」を行い、遊びの中で外国語にふれよう

目的／
幼児教育原理では、幼児期の遊びのなかにみられる学びに注目し、幼児が学びによって共通にたどる道筋を明らかにしていく。さらに、その学びの概念から見えてくる幼児の発達の特性や、それに基づいた指導計画の作成、保育者の援助などを理解する。さらに、2011 年度から小学校 5・6 年生の「外国語活動」が必修化されることになり、学級担任が主体的に指導することが「外国語活動」の発展に欠かせない。初等英語教育研究では、小学校英語活動の指導者養成をめざす。
こうした両科目の目的を達成するために、幼児教育現場で要望がある「英語あそび」のサービスを行うことを通し、それぞれの専門的学びを高め、実践力を涵養しようとするものである。

内容／
授業で学んだ幼児の発達特性と、英語活動の理論講義、指導法、実技指導、同時に classroom English の指導法を統合し、幼児教育現場での「英語あそび」を企画・準備・実践していく。その過程でのカンファレンスを通し、両科目の学びを深めていく。さらに、実際の活動後の振り返りにより、成果と課題を具体的に検証し、今後の学びの方向性を描き出すものである。

初年次

学科の学びを理解し、オープンキャンパスで伝えよう

目的／
自分の所属する学科の 4 年間の学びについて、どのようなプログラムがありどのように進めていくのかなど情報を収集し、オープンキャンパスの参加者に伝えるためのプログラム企画、実施およびプログラム評価を行うことで、次のことを目指す。1）グループワークを通した、人間関係調整力の養成、2）自らの学習への理解と 4 年間の計画作り、3）プログラムの企画、運営、評価の基礎を学ぶ、4）コミュニケーション・プレゼンテーション能力の向上。このプログラムは学内でサービスを提供する機会を利用し、将来の学外でのサービスラーニングに参加するための基礎力養成を目指す段階である。

国際支援、国際交流、多文化共生プログラムへの参加を通して国際的視野を広げよう

目的／
国際支援、国際協力、多文化共生等の活動に参加しながら、国際的視野を広げるとともに、SL の意義を理解し、自己成長のための学習目標の設定と振り返りのプロセスを学ばせる。グループワークにおける役割分担、人間関係調整力の重要性に気づかせる。

内容／
国際支援、国際協力、多文化共生等の活動をしている団体での活動に参加しながら、各団体でどのような活動が行われているのか、その目的や意義についての学びを深める。各団体の活動で学んだことを基に、自分たちに今できる取り組みを考え、International Fair を実施した。そこで上げた収益をどのような形で役立てるのかについても、自分たちで考え寄付する団体を選んだ。

複合化・重層化

複合化（初等英語教育研究Ⅰ＋初等英語教育演習Ⅰ）

授業での学びを生かして、こども達に英語を教えよう

目的／
児童英語教育の知識を実践を通して身につけさせる。実際に子供たちと接することで、自分に足りない能力に気づき、今後のどのように学習を進めていくべきかについて考えさせる機会とする。

内容／
授業で学んだ児童英語教育の知識をもとに、地域の子供たちを大学に招き週１回の英語教室を行った。授業で学んだことを基に、英語教室の授業計画をたて、実施後の振り返りを繰り返し行うことで、実践力の伴った知識を身につけさせること目指した。

本学におけるサービスラーニングの事例

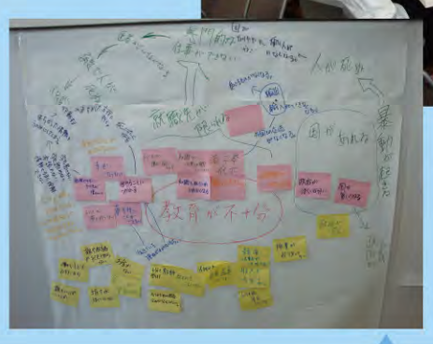
海外
サービスラーニング

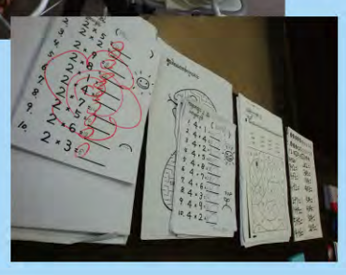
カンボジアの子どもの学力向上に向けた取組
—算数教育と教材支援—

目的／
カンボジアの地域の課題（生活ニーズ）を発見し、グループで協力して解決する能力を身につける。

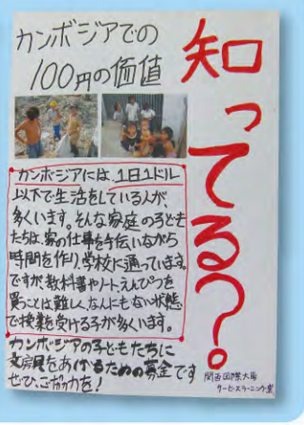
内容／
カンボジアが抱える教育上の課題の一つに、教員不足があげられる。給与水準の低さや、指導的役割を担う教員の不足で、児童に対する個別的な指導が不十分となっている。合わせて経済的な問題から、教科書やノート、筆記具、教材が十分に行き渡らない状況にある。生活のために労働に従事せざるを得ない児童もおり、勉強についていけずいつまでも進級できなかったり、小学校へ行かなくなったりしている。これら現状に基づいた支援として、貧困層における低学力の子どもの算数教育（九九指導）に向けて、①市販の九九カードや計算ドリルを活用した効果的な学習の支援、②使用教材を活動した小学校に寄贈するため、事前活動として教材購入資金の確保に向けた募金活動に取り組んだ。

事前学習





募金活動



ふりかえり

・事前学習（活動）、現地活動、事後活動の各段階でふりかえりを実施した。

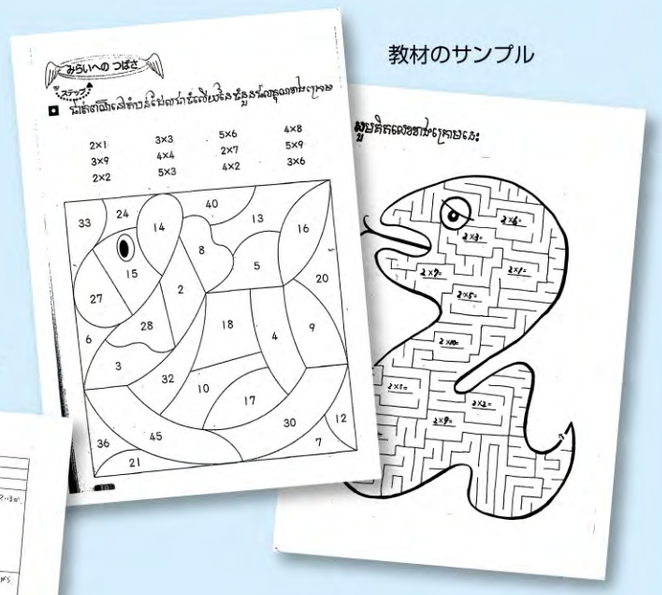
・現地活動のふりかえり（個人・グループ）は毎日２時間程度実施。

── 次回の授業展開や準備に関する打ち合わせも含む

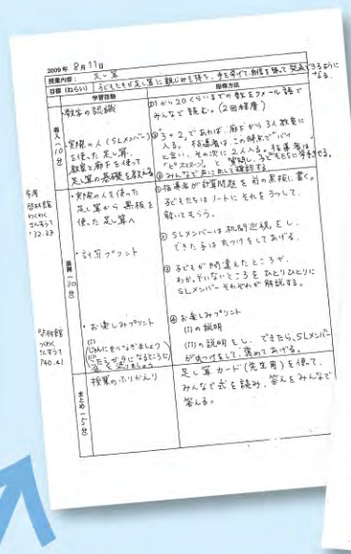
── 日々のふりかえり（個人）・授業展開に関するふりかえり（グループ）は翌朝に提出

授業展開

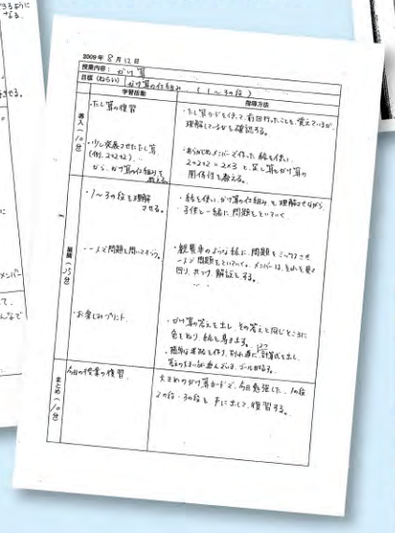
・能力別２クラス編制
・学生作成による教材やプリントの使用する
・理解に応じた授業展開や教材を工夫
・勉強の習慣づけを意図した宿題の提示
・実力（初回）テスト、中間テスト、最終テストの実施



教材のサンプル



学生が考えた算数の指導案



成績表

名前	実力（初回）テスト		最終テスト		点数（正解数）
	正解数	回答数	正解数	回答数	上昇率(%)
A	8	14	21	32	262.5
B	3	4	41	43	1366.6
C	4	6	52	54	1300
D	ー	ー	12	21	ー
E	2	34	11	14	550
F	9	11	42	50	466.6
G	10	12	35	38	350
H	10	11	39	43	390
I	14	14	27	32	192.8
J	12	19	47	48	391.6
K	66	74	99	100	150
L	24	27	72	79	300
M	12	12	43	45	358.3
N	18	24	71	75	394.4
O	20	22	46	68	230
P	ー	ー	75	76	ー

個別的な指導展開 （子どもの特徴を把握）

子どもたちを個別に支援するため、それぞれの特徴を把握し、学力に応じた指導を展開していった。以下は、その子どもの特徴の抜粋。

B:はじめは、おはじきを使いながら、ゆっくり丁寧に解いて、それほどスピードも速くなかったが、テストでも伸び率がクラスで１番高く、好成績をおさめ、飛躍的に成長した。

C：集中させて取り組ませると、計算の能力、スピードも伸びた。勉強するときは、集中して取り組み、遊ぶときはよく遊ぶといったメリハリがつくようになった。テストでもその姿勢があらわれ、点数向上率が飛躍的に伸びた。

E：ムードメーカーでリーダー的存在。反面、落ち着きがなく私語が多い。自身がクラスの中で学力が低いことを自覚しており、みんなに追いつこうと必死に頑張っている姿が見られた。周りをよく見ていて、クラスの中で元気のない子がいれば、声かけする姿が見られた。

F：勉強するときはしっかり話も聞けていたが、視線が合わなかったりすることがありコミュニケーションのとりにくいこどもであった。日々の授業やレクレーションで、こちらから声かけを続けることで、笑顔も見せるようになった。真面目に取り組む姿勢から、成績も向上した。おはじきがなくては掛け算ができない子であったが、最終テストでは、おはじきなしで解けていた。

受け入れ小学校長からの評価

活動先である小学校の校長先生から、貢献活動に対する評価をもらった。

※小学校校長へのインタビュー

1. 学生のかかわりについて（学生の取り組む姿勢について）

Q. 子どもたちが学校に来て学ぶことの楽しさや喜びがもてるような働きかけをしていましたか。

── 今までに教えたことのない方法で実践をされていた。授業の中に遊びを取り入れていることに興味を持った。それにより子どもたちは楽しそうにしていた。子どもとの接し方について参考になった。

2. プログラムについて（サービスラーニング活動全般について）

Q. 算数の支援は小学校にとって有益なものになりましたか。

── 算数、特に計算力は社会に出るために必要なものである。お金をだましとられることもめずらしくないので、子どもたちにとって算数は必要である。